

# S18 International Presidents' Forum (IPF)

開催日時：2025年11月7日（金） 14:10～15:40

会場：千葉県文化会館・大練習室

登壇者：エヴェリン・リー AIA（アメリカ建築家協会）会長  
アセー・スカヤン ASA（タイ王立建築家協会）会長  
キム・ジェロク KIRA（大韓建築士協会）会長  
リエ・ギブソン KIRA（大韓建築士協会）国際委員長  
ハン・ヨング KIA（韓国建築家協会）会長  
佐藤尚巳 JIA（日本建築家協会）会長  
竹馬大二 JIA（日本建築家協会）国際委員会アドバイザー

REPORTER



沓掛涼太

（千葉工業大学大学院 修士2年）



当日の様子。登壇者と参加者で白熱した建築議論が行われた。

## 1. 企画の意図

本トークセッションは、世界各国の建築家協会の代表が集まり、社会の変化が進む現在において、建築家がどのような役割を担うべきかを改めて考えることを目的として企画されたものである。AI技術の急速な発展や環境問題、人口減少といった課題は、建築のつくり方だけでなく、建築家の働き方や社会との関わり方にも大きな影響を与えている。こうした中で、建築家は単に建物を設計する存在ではなく、社会の変化に回答しながら新しい価値を生み出す役割を求められている。本セッションでは、各国の建築家協会が抱える課題や取り組みを共有することで、建築家という職能の今後のあり方について考える場が設けられた。

## 2. トークセッションの概要

司会は日本建築家協会（JIA）国際委員会アドバイザーの竹馬大二さんが務め、アメリカ、タイ、韓国、日本の建築家協会代表が順に登壇した。発表内容はそれぞれの国の社会状況や制度を背景としたものであったが、建築家が社会とどのように向き合うかという共通のテーマが通底していた。

最初に登壇したアメリカ建築家協会（AIA）会長のエヴェリン・リーさんは、建築分野におけるAI活用の現状について話した。AIを単なる作業の効率化のための道具としてではなく、建築実務の進め方そのものを

変える可能性を持つ存在として捉えている点が印象的であった。AIAではAIタスクフォースを設立し、建築家がAIをどのように使うべきか、またどの部分を人間が判断すべきかについて議論を進めているという。学生の立場からも、AIを使うかどうかよりも、その結果をどのように受け止め、判断するかが重要であることを改めて考えさせられた。

続いて登壇したタイ王立建築家協会（ASA）会長のアセー・スカヤンさんは、協会が行っている社会的な取り組みについて紹介した。建築展の収益を地域文化や地方の活性化に還元する仕組みや、市民参加型のプロジェクトの事例が示され、建築が社会や経済と密接に結びついていることが具体的に伝えられた。設計行為だけでなく、その後の社会との関係まで含めて建築家の仕事であるという考え方が、実践を通して示されていた点が印象に残った。

3人目に登壇した大韓建築士協会（KIRA）のキム・ジェロクさんと国際委員長のリエ・ギブソンさんは、建築家の教育や報酬制度、国際交流について発表を行った。建築家を短期的に評価するのではなく、教育から実務、継続教育までを一つの流れとして考える必要性が語られた。また、規制が過剰になることで建築表現の自由が制限されてしまうという指摘は、建築文化の豊かさについて考えるきっかけとなった。

続いて、韓国建築家協会（KIA）会長のハン・ヨンゲンさんは、韓国の建築の歴史を三つの時代に分けて説明した。現在は、建築家だけでなく市民と協力しながら社会をつくっていく段階に入っているという話は、建築の価値を専門家だけのものにしない姿勢を感じさせるものであった。また、AIの発展によって人間の感性や倫理がより重要になるという指摘は、他の登壇者の発表とも共通しており、本セッション全体を通じた重要なテーマであると感じられた。

最後に、日本建築家協会（JIA）会長の佐藤尚巳さんが登壇し、AIが担える仕事と人間が担うべき仕事について整理して説明した。情報処理や分析はAIが得意とする一方で、文化的な判断や社会的な責任は人間にしか担えないという考え方は、今後の建築実務や教育の方向性を考える上で理解しやすい内容であった。

現在は、建築家だけでなく市民と一緒に社会をつくっていく段階に入っているという話は、建築の価値を社会と共有することの大切さを改めて感じさせるものであった。また、AIの発展によって人間の感性や倫理がより重要になるという指摘は、他の登壇者の意見とも共通していた。



3人目に登壇した、KIRA 国際委員長のリエ・ギブソンさん。



4人目に登壇した、KIA（韓国建築家協会）ハン・ヨンゲンさん。

### 3. 当日の質疑応答

質疑応答では、人口減少や建築教育、AIをどの段階で取り入れるべきかといったテーマが取り上げられた。AI教育についての質問に対し、エヴェリン・リーさんは、導入の時期よりも、建築教育全体の考え方を見直すことが重要であると述べた。特に、技術の使い方を教える以前に、建築家として何を判断し、どこに責任を持つのかを明確にする必要があるという指摘が印象に残った。

また、人口減少社会における建築の役割については、量を増やすことよりも、暮らしの質を高める方向へ視点を転換する必要があるという意見が出された。住宅や都市をどのように維持し、使い続けていくかという問題は、国による状況の違いはあっても、今後避けて通れない共通課題であることが確認された。

### 4. まとめ

本トークセッションを通して、建築家は建物を設計するだけの存在ではなく、社会と人との関係を空間として形にする役割を担っていることが改めて示された。AIや技術が進歩しても、建築の価値を最終的に決めるのは人間であり、倫理や文化への配慮が欠かせないという点は、すべての発表に共通していた。

学生レポーターとしては、設計の技術を身につけることに加えて、社会とどのように向き合い、どのような価値を提供するのかを常に考え続ける姿勢が重要であると感じた。各国の事例や考え方をすることで、日本の建築教育や将来の実務を、より広い視点から見直すきっかけにもなった。

本フォーラムは、建築家の将来像を国境を越えて共有すると同時に、これから建築を学び続けていく立場にとって、自身の進む方向や専門性のあり方を考えるための重要な機会となった。



登壇者（左から）：竹馬大二さん、ハン・ヨンゲンさん、佐藤尚巳さん、エヴェリン・リーさん、キム・ジェロクさん、アセー・スカヤンさん。